小中連携の9年一貫で取り組む品格教育5年間の効果 (2)

○井邑智哉¹・青木多寿子²・野中陽一朗³

(¹精華女子短期大学, ²広島大学大学院教育学研究科, ³兵庫教育大学)

キーワード: 品格教育, 学校全体での取り組み, 介入の直接効果

Whole school approach of character education during compulsory education

Tomoya IMURA¹, Tazuko AOKI², and Yoichiro NONAKA³

(¹ Seika Women's Junior College., ² Graduate School of Education, Hiroshima University., ³ Hyogo University of Teacher Education)

Key Words: Character Education, Whole School Approach, Direct Effects of Intervention

目 的

品格教育とは、子ども達がよい行為の習慣をつくるように支援する教育である。その方法として責任、根気など、核となるテーマを共通に定め、それらを通して、児童生徒が主体的により行為の習慣づくりに取り組めるように励ましていく。本研究では、教育委員会主導で、学校だけでなく、家庭や地域を巻き込み、小中連携で長期にわたって包括的に取り組む品格教育、すなわち様々な品性に关わる「よい行為の習慣作り」を実践し、その教育効果を検証することを目的とする。

方 法

調査対象者

ある地域の教育委員会を通して、その地域の公立学校に通う児童生徒が対象となった。期間は平成19年から平成24年である。教育実践は、小中学校に通う全学年の児童生徒に対して行ったが、教育効果の測定については、そのうち小学校4、6年生と中学2年生に対して行った。

教育効果の測定尺度

(a) 児童生徒用品格尺度 (井邑他, 印刷中), (b) 生活充実感尺度 (高橋・青木, 2010), (c) ソーシャルサポート尺度 (中上・野口, 2004; 以下, SS 尺度と略記する), (d) ホープ尺度 (Snyder, 2005), (e) 主観的幸福感尺度 (島井他, 2004)。品格尺度以外の尺度は児童生徒の Well-being を測定する目的で用いた。

結 果

児童生徒の品格得点の変化

以下の分析では、児童生徒用品格尺度の下位尺度ごとに平均値を算出して用いた。各下位尺度のクロンバックの α 係数を各年で算出した結果、 $\alpha=.64-.82$ であり概ね満足できる値であった。品格教育の効果が見られるかを検討するために、しなやかさ尺度の下位尺度得点を従属変数とする、年(6)×学校種(2)の分散分析を行った。年は平成19、20、21、22、23、24年の6水準であり、学校種は小学校と中学校の2水準であった。主効果や交互作用効果が見られるところについては、単純主効果の検定や Bonferroni による多重比較を行った。

分析の結果、根気・誠実得点では年と学校種の交互作用が見られ

た($F(5, 6537)=4.21, p<.001$)。下位検定を行った結果、小学校では、平成19、23年の得点が他の年の得点に比べて有意に高く、中学校では平成24年の得点が、平成20、21、23年の得点よりも有意に高いことが明らかとなった。

勇気・工夫得点では、年と学校種の交互作用が見られた($F(5, 6539)=7.38, p<.001$)。下位検定を行った結果以下、小学校では、平成19、23年の得点が他の年の得点よりも有意に高く、中学校では、平成23、24年の得点が他の年の得点よりも有意に高いことが明らかとなった。ただし、中学校において平成22年と平成23年の間に有意差は見られなかった。

寛大・感謝得点では、年と学校種の交互作用が見られた($F(5, 6534)=2.73, p<.05$)。下位検定を行った結果、小学校では、平成23年の得点が平成20、22年の得点に比べ有意に高く、中学校では平成24年の得点が他の年の得点に比べ有意に高いことが明らかとなった。

フェア・配慮得点では、年と学校種の交互作用が見られた($F(5, 6533)=2.69, p<.05$)。下位検定を行った結果、小学校では、平成23年の得点が、平成20、21、22年の得点に比べ有意に高く、中学校では、平成24年の得点が平成19、21、22年の得点に比べ有意に高く、平成23年の得点が平成21年の得点よりも有意に高いことが明らかとなった。

児童生徒の品格と Well-being の関連

品格教育を5年間実施し、各学校で長期的な取り組みが行われた後の平成24年において、児童生徒の品格が Well-being とどのように関連するかを検討した。Well-being に関わる変数のクロンバックの α 係数を検討した結果、 $\alpha=.76-.82$ であり概ね満足できる値であった。小学生と中学生それぞれで、4種類の品格(根気・誠実、勇気・工夫、寛大・感謝、フェア・配慮)が生活充実感、主観的幸福感、ホープ、SS と関連するというモデルを仮定し、構造方程式モデリングによる多母集団同時分析を行った(Table 1)。ワルド検定によって有意な影響が見られなかったパスを削除しながら同様の分析を繰り返した結果、GFI=.992, AGFI=.963, CFI=.997, RMR=.017, RMSEA=.024 と許容できる適合度が示された。

Table 1 4種類の品格と Well-being の関連 (平成24年データ)

説明変数	目的変数			
	生活充実感	主観的幸福感	ホープ	SS
根気・誠実			.13 / .13	
勇気・工夫	.17 / .19	.19 / .21	.53 / .59	.13 / ns
寛大・感謝	.21 / .46	.27 / .35		.46 / .70
フェア・配慮	.20 / ns		.20 / .18	
R^2	.23 / .36	.17 / .27	.52 / .63	.29 / .49

注1) 左側の数値は小学生の結果を、右側の数値は中学生の結果を示す。

注2) 数値は標準化係数 β 。表記したパスはすべて5%水準で有意。